

清流

題字：芳野 充

平成30年8月30日
第20号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

徳やかに
静かに
清流のように

キライが減ると、可能性がひろがる

ある日のわが家の食卓にて。

小学校四年生の娘がテーブルに肘をつき、うらめしそうな顔をして、ハシで「もずく」をつついていきます。「ゴーヤ」について娘のキライな食べ物です。キライな食べ物が食卓にならんだときは、食べ終わるまでにずいぶんと時間がかかります。好ききらいは健康に良くないこと、食べ物は命であること、残すことはその命をムダにすることにつながることなど促すものの、口にいられてはえづくので、私たちも見かねて、「ごめんなきいを言っ、口のものを出しなきい」と根負けします。ただ、子どもたちの食べ物の好ききらいをなくしたい理由は、他にもあります。

「日常の心がけ」の十七番目には「ものごとの好ききらいはつつしむ」とあります。素心学塾塾長の池田繁美先生は「『食べものの好ききらい』は、人や仕事、ものごとの好ききらいを生みます。きらいなもの、苦手なものにも目を向けてみると、新しい可能性が大きくひろがることでしょう」（『素心学要論』より）とおっしゃっているからです。

わたしも妻も、過去には食べ物の好ききらいがありました。今ではなくなりました。大人になることで、好ききらいが減るということもあるとは思いますが、やはり子どもうちからキライを減らせるのなら、減らしたいと思えます。キライな食べ物が減ると、食事はまちがいに、いま以上に楽しく、そして健康になるはず。です。

また、人に対してもおなじことを感じます。「あの人は何かイヤだな」「あんな人はニガテだ」と思うことはわたしもあります。ただ、以前とちがうのは、人に対してマイナスの感情をもっていることに気づいたときには、「わたしが相手の良いところに気づいていないだけで、素晴らしいところが間違いなくある」と思って接することが、多少なりとも意識できるようになったことです。その結果、やはり相手の素晴らしいところに気づき、そこから人間関係が良くなる、という体験を何度も味わいました。このことから、何ごとに対しても、キライが減ると、可能性がひろがるのだな、と実感します。

加来 寛

